

財界パトロール

検審疑惑追及の志岐武彦氏が 『一市民が斬る!!』 最高裁の黒い闇』を刊行

本誌2014年4月号を皮切りとする短期集中連載(検察審査会と最高裁の闇)において、小沢一郎議員に対して2度にわたって起訴相当議決を下した東京第5検察審査会の「架空議決疑惑」に鋭くメスを入れた「一市民」こと志岐武彦氏が『一市民が斬る!! 最高裁の黒い闇—国家の謀略を追った2000日の記録—』(鹿砦社)を上梓した。

小沢一郎議員に対する強制起訴を決めた検察審査会には審査員がいなかったのではなか—。著者の志岐氏はこうした重大疑惑を読者に提示するとともに、その真相に迫るべく段ボール箱2箱分にも上る資料を独自収集し、それらを丁寧に分析しながら徹底検証を試みている。

70歳を超えてもお衰えることを知らない調査能力と執念は圧巻だが、とはいえず志岐氏はもともと旭化成に勤めるサラリーマンであり、取材活動にのめり込むようになったのは定年退職後のことだ。〈退職をして急に暇になると、ぽっかり穴が開いたようだった〉

ご本人はこう心境を語るのだが、そんな志岐氏がひよんなことから住民運動に参加。何人もの国会議員に陳情していく過程で徐々に政治に深い関心を寄せるようになり、また同時にマスコミの傲慢さやイイ加減さに憤り、ひいては自らが市民ジャーナリストとしての活動に乗り出すという、その溢れんばかりのバイタリティが読んでいて痛快極まりない。

点ともいうべき最高裁事務総局にまで乗り込んで徹底取材を取行する様は、同世代の読者に大いに勇気を与えるに違いない。

ただし志岐氏の市民ジャーナリストとしての活動は決して順風満帆だったわけではない。最高裁事務総局の疑惑を追及する過程で、同士だった森裕子・元参院議員と決別。ほどなくして森氏が志岐氏を名誉毀損で民事提訴し、同氏がいうところの「恫喝裁判」の被告にされたのだった。

害賠償請求をするなど前代未聞だが、そんな脅しめいた裁判を志岐氏はひるむことなく受けて立ち、見事に完全勝訴する。

また他方、ツイッター上ではある市民運動家から誹謗中傷されもしたが、いかなるバッシングにも志岐氏は屈しなかった。

こうした一連の経過は文字どおり不撓不屈のドキュメントであり、単なる調査報道ではなく、読み物としても十分に心を打つ一冊である。

なお、本文中には「財界にいがた」に関する記述もあるので是非とも一読を。



▲『一市民が斬る!! 最高裁の黒い闇』(鹿砦社、四六判・238頁、定価1400円=税別)